

子どもと環境：コーナー遊びに焦点をあてて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中山, 美佐 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4842

子どもと環境 —コーナー遊びに焦点をあてて—

児童教育学部 児童教育学科 中山 美佐

要旨：本稿は、幼稚園教育におけるコーナー遊びに着目し、その中でも、特に自然や飼育を取り入れているコーナー遊びに焦点をあてて考察する。幼稚園教育要領の『環境』のねらいには、「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心を持つ。」とある。また、幼児期に育てほしい10の姿では「自然との関わり・生命尊重」が挙げられている。自然と触れ合えるコーナー、また飼育コーナーは、子どもの好奇心や探求心を豊かにしていく。幼稚園教育要領の『環境』を読み解きながら、実際に保育者がどのように環境への取り組みを行っているのか、様々な園の自然との触れ合いコーナー、飼育コーナーから調査した。この結果から、環境を通して行う保育は、保育者が意図して、自然と触れ合える遊びのコーナーや飼育コーナーなどを設けることにより、子どもの豊かな感性や、意欲を育て、非認知能力も育てられるなど、多くの面で、とても重要であるであるとわかった。幼児教育の中で自然環境から経験し、学ぶことは他のものでは補えないと考察される。

キーワード：環境、自然、コーナー遊び、保育者、ねらい

はじめに

本稿は、学生の幼稚園教育実習園のコーナー遊びに着目し、様々な園の環境への取り組みについて考察するものである。園については各園によって取り組み方に違いはあるものの、環境には保育者の意図が組みとれる。幼稚園教育要領「環境」の内容として「(1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。(3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。(4) 自然などの身近な事象に関心を持ち、取り入れて遊ぶ。(5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」¹⁾と書かれている。子どもの育ちにとっていかに自然が重要であるかがわかる。これは子どものみならず、子どもとかわる保育者にとっても同じように重要であるだろう。

レイチェル・カールソン著のセンス・オブ・ワンダーには、子どもを大きな自然の中に連れ出し、美しいもの、偉大なもの、神秘的なものに触れさせていく様子が書かれている。自然は、人の心を震わせたり、優しくさせたり、脅威を感じさせたり、大きな発見や感動をあたえたりする。豊かな自然と触れ合うことにより、大人も子どもも豊かな感性を磨くことができるのであろう。この著書の中に月を静かに見つめる部分がある「このようにして、毎年、毎年、幼い心に焼き付けら

れてゆく素晴らしい光景の記憶は、彼が失った睡眠時間をおぎなうあまりあるはるかに大切な影響を、彼の人間性にあたえているはずだとわたしたちは感じていました」²⁾と述べている。子どもの睡眠時間を削ったとしても、それでも、それ以上に自然と接することの重要性、大切さがあると述べられている。このような豊かな自然との関わりを保育者たちは子ども達にどのように持つようにかかわっていきけるのだろうか。また「子どもたちは、きっと自分自身が小さくて地面に近いところにいるからでしょうか、小さなもの、目立たないものを探してはよろこびます。そのことに気がついたならば、わたしがふだん急ぐあまりに全体だけを見て細かいところに気をとめず見を落していた美しさを、子どもとともに感じ取り、その美しさを分かち合うのはたやすいことです。」³⁾とも述べている。これは子どもの発見について、いかに保育者が気付けるかについて学ぶところであろう。子どもがその小さな手で触れて、見て、においを嗅いで、時には耳を澄ませて感じるものに、ともに感動し、喜びを持つことの大切さがわかると考えられる。

忙しい子育てをしている親は、頻りに子どもを豊かな自然の中に連れ出すことは、難しい場合が多いのではないだろうか。また、連れ出すことができても、それがいかに大切であるかをどこまで考えられているの

だろうか。個々の親の想いによって違うだろう。

子どもを意図的に自然とかかわれるようにするために、幼稚園では、子どもが様々な自然との経験を持てるように、園には自然豊かな場所、または経験できる機会を取り入れて欲しい。どの子どもにも、自然を感じられる環境が与えられて欲しい。たとえ、雄大な海や、大きな森を園に作ることは不可能であったとしても、子どもたちが身近にある自然を豊かに感じられる環境は、子どもが育っていく中で、非常に重要だと考えられる。また、その自然に目を向けることができる保育者の感性もまた、大きな人的環境であるだろう。

I. 調査の目的と方法

1. 調査の目的

この調査の目的は様々な園において、どのように自然環境や飼育環境などを取り入れているかを観察し、子どもたちが、どのように自然や生き物とのかかわりをしているのかを知ることである。また、自然とかかわることで子どもの育ちにどのような影響があるのか、また、保育者のかかわり方を知ることが目的とする。

2. 調査方法

学生が幼稚園教育実習している園に実習訪問し、実際に自然にかかわるコーナーを見学し、園の保育者から、その環境に子どもたちがどのようにかかわっているのか、また、保育者自身が子どもたちとどのようにかかわっているのか聞き取り調査を行った。聞き取り調査対象は園長、または主任とした。その際、調査結果を論文にて公表する旨の許諾を得ている。

II. 様々なコーナー環境の様子

1. 保育室内コーナーの様子とかかわり



図1 メダカコーナー

図1では、子どもが家から持ってきたメダカを保育室のコーナー遊びとして置いている。この園は自然豊かな地域であり、子どもが家に帰り、家の近隣の川で

捕ってきたメダカを飼っている。とても小さくて見えにくいいため、虫メガネを置いている。子ども達は虫メガネでメダカを観察したり、餌をあげたりしている。コーナーでの飼育は園ではよくあるが、メダカの飼育環境は珍しい。きれいな水の中にしか生息しないと言われており、保育者も常にきれいな水を保てるように配慮している。子どもにより興味を持つ様子は違う。毎日観察したり、餌をあげたりする子どもと、ほとんど興味を示さない子どもがいる。メダカを持ってきたことにより、保育者は子ども達と、メダカは何を食べるのか、どのような様子で育っていくのかをとともに調べ、少しでも興味を持てるようにしている。同じように水の中で育つ生物でも、このように小さい生き物を育てることは、子どもにとって「小さい生き物」に目を向けられる良い機会であると推察される。

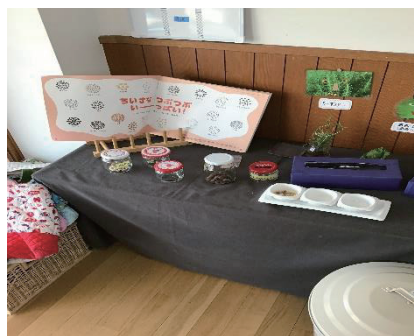


図2 種コーナー

図2では様々な種コーナーを作っている。子ども達は小さなものを見つけることが得意である。保育者は、子どもが「こんなもの拾った」と持ってきたものをそのまましておくのではなく、何だろうと、保育者と共に調べる、または、調べられる環境を用意しておく。このことにより、自分で調べる楽しさや、発見した喜びや、種そのものや、育ててみることにもつながっていくと推察される。何気なくあるコーナー遊びのようであるが、保育者の深い意図が感じられる。はっきり何と分かった「つぶつぶ」もあればまだ何かわからない未知のものもある。いつの間にか芽を出す植物もあるかもしれない。それ等のものについては、これからも観察したり、調べたりすることができ、子どもにとっては楽しみな遊びの一つとなると考えられる。保育者が傍らで見守る、または言葉かけすることにより、子どもの関心は深く、また引き続き保つこともできるだろう。子どもの小さな発見は豊かな育ちになると思われる。

図3では、子どもが拾ってきた鳥の羽からこのコーナーができています。「羽って何?」「どんな鳥?」「飛

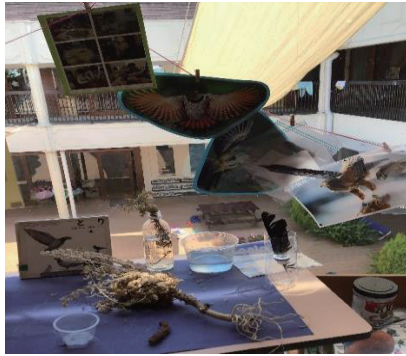


図3 鳥コーナー

ぶって？」そんな様々な「何？」から子どもの興味や関心が大きくなっていくように保育者はこのコーナーを作っている。様々な木の端も鳥には必要、鳥はこんなものを集めている、そんな子どもの気づきを大切にしている。羽から子どもが考えることを、保育者は「空」なのか「飛ぶこと」なのか「鳥の巣」なのか、どこに向かってもすべて大切と考えることができている。

2. 室外コーナーの様子とかかわり



図4 泥だんごコーナー

図4は、園庭での砂場でだんごを作り、ぴかぴかだんごにする過程の作品を保育室外の濡れないところにコーナーを置いている。ぴかぴかだんごは一日ではできず、何日もかけて作る。乾かして、次の日に持越し、また、次の日もというように少しずつ作り上げていく。子ども達の中で、明日は、これをまた作ろうと、楽しみにしながら、「昨日の続き」を遊ぶのである。砂や土は子どもの身近な自然の素材であり、どの園にもある。砂の変化は様々であり、サラサラな砂、水を含んだ硬い砂、水をたっぷり含んだドロドロな砂、この砂遊びは4歳児から5歳児まで十分に遊べる自然遊

びであり、変化を楽しむ、発見する、一人で遊ぶ、みんなで遊ぶといったことができ、園では外せない遊びの一つである。ぴかぴかだんごは4歳児くらいから工夫して遊べると推察する。子どもの遊びを大切に考えられたコーナーである。



図5 秋の自然コーナー

図5のコーナーは、秋に子どもたちが持ってきた葉っぱやどんぐりなどを入れているコーナーである。靴箱の上のコーナーである。これはあとで何かに使えるかも、と保育者が意図して箱を置いている。子ども達が次々と持ってきて、時にはごそごとと中身を確認したり、どんぐりの大きさ比べをしたり、形を見たりする。時には、葉っぱのカサカサとする音や、様々な色を見たりすると聞く。夏のみずみずしい葉っぱにはない触覚や音、また、それを使って見立てて制作もできる。どんぐりを使ってどんぐり転がしの制作に発展することもある。ある組では組み全体の取り組みになることもある。または、隣の異年齢組と取り組む遊びに発展することもあると聞く。保育者が素材を置いておくだけで子どもの遊びに繋がることもある。何気ないコーナーではあるが、これもまた、子どもと自然のかかわりについての保育者の意図が感じられる。

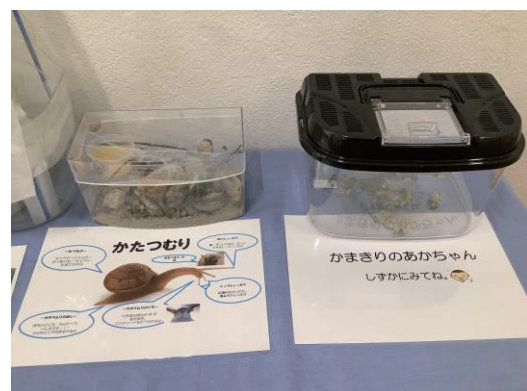


図6 飼育コーナー

図6は廊下に置かれた飼育コーナーである。カタツムリもカマキリも園庭で子どもが見つけた生き物であ

る。いかに園庭が自然にあふれているかがわかる。園庭には花壇や小さな畑などがあることが多くある。この少しの自然の中で小さな生き物が育つ。飼育コーナーは多くの園にある。毎日、この生き物たちを覗いて「大きくなったかな」「おはよう」と声をかける子どもたちがいて、大切に育てている。小さくても、命を感じられる自然環境と言えるだろう。園によっては青虫から蝶になるまで育てて、みんなで園庭に放すこともある。自然の中の生き物は小さくても、大きくなっていくことや、大きくなればその形が変わることも経験として学ぶことができる。自然との関わりは、遊びながら、経験を通して学ぶことに繋がる。また、生き物への興味関心も持てる大切な環境である。



図7 園庭での田植えコーナー

図7は園庭の片隅に作られた田植えコーナーである。この園では、田植えを子どもと一緒にやり、それをずっと保育者と子どもで育て続けて収穫まで行う。収穫しておにぎりつくりをして、自分で作ったお米でお昼ご飯をおにぎりにして食べる日がある。おにぎりを握ることも初めての子が多く、作ることも楽しみながら、とても喜んで食べると聞く。いつものお昼ごはんを食べるお米とは違う味と感ずるのではないかと推察する。また、お米ができるまでの行程の長さや大変さも、経験を通して遊びながら学ぶことができる環境である。



図8 枝豆栽培コーナー

図8は、園庭の菜園コーナーで、枝豆を育てているところである。この枝豆は、「父の日」の参観日に、親子で収穫をして、持って帰るようにしている。子ども達が、親の来る日に一緒に収穫する日を楽しみに待ち、育てている。園で子どもだけで収穫して、園で調理して食べる経験はよくあるが、親子で収穫は珍しい。子ども達は、親の喜ぶ顔を想像しながら、一生懸命に育てたのだと想像できる。苗から育てたとのことであるが、少しずつ大きくなる様子を毎日のように観察していたのではないだろうか。保育者もその様子から、苗がしっかり大きくなり、親子で収穫できるように、子どもたちが降園した後に、どの子どもの苗も同じように育っているか観察しながら、時には手を加えていたのだろう。無事にこの枝豆は親子で収穫されて、持ち帰られたという。

園では、よくプチトマトが育てられている。そして、家のプチトマトは食べないのに、園の中で子ども自ら育てたトマトは美味しいと子ども達は食べる、などとよく聞く。自分で育てた野菜は、子どもには特別であり、この関わりをきっかけにして、食べられる野菜が増えることもあるようである。自ら育てる、そして収穫するという経験も大きな自然の恵みを感じられる環境である。

III 考察

幼稚園教育要領『環境』内容の取扱いについて「(2) 幼児期において自然の持つ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然との関わりを深めることができるよう工夫すること。(3) 身近な事象や動植物に対する感動を伝えあい、共感しあうことなどを通して自分からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探求心などが養われるようにすること」⁴⁾とある。幼児にとって自然を通して感じることや、思うこと、考えることがいかに大切であるかが述べられている。ではなぜ「自然」との関わりについてここまで重要と書かれているのだろうか。それは、ノーベル経済学賞を受賞したジェームス・J・ヘックマンの「ペリー就学前プロジェクト」が大きく影響されているのではないだろうか。この研究により、就学前の子ども達へのかかわりが、それ以降の人生に大きな影響があることが証明された。この研究内容から、非認知能力

は幼児期に生まれ、それが今後の人生に大きく影響すると捉えることができる。そして、非認知能力こそ「自然環境」を通して伸ばせることが多いと考えられる。無藤（2018）は「この『非認知能力』を育む有効な方法の一つとして注目されるのが自然体験です。幼児期においては『非認知能力』は『遊び』の中で育まれると言われており、子どもが『心動かされる体験』や『挑戦的な活動』ができるような環境が大切だと指摘されています。」⁶⁾と述べている。これは、自然の中の遊びが、人工的なものを使用して遊ぶことよりも、より大切であることを示唆していると考えられる。

ひと昔前は、自然が多く、家の近隣には自然が溢れており、子ども達はその自然の中で遊び、その自然体験から多くのことを知らず知らずのうちに、経験を通して「非認知能力」を育んできたと考えられる。しかし、現在の子どもを取り巻く環境は変化してきている。子どもの親世代も、自然豊かな中で育ってきていないことも考えられる。このような中で園が取り組む「自然環境」はとても大切であるだろう。

また、NTT データ自然研究所の調査結果から子どもを育てる親から「『ほとんど自然体験ができていない』が20.5%と2割であり、『あまり自然体験ができていない』は46.0%と最も多く、両者を合わせると、子供の自然体験不足を認識している人は約3分の2であった。」⁷⁾とある。これは、親たちも自然を通して子どもとかかわることについて大切であるにも関わらず、自然環境不足であると考えていると思われる。また、「地方への移住・転職などを行う場合、保育園・幼稚園の条件として、特に魅力があると思うものとして『自然環境を活かし、子供の五感、生きる強さ、主体性を育成する保育・教育のある環境』が最も多く第1位として選択した人が59.4%、1位～3位の合計では87.2%に上った。次いで、経済的支援や早期教育なども半数以上であった」⁸⁾との調査結果もある。親世代が子育てする上で自然環境が大切であると考えられていることも明らかになっている。保育者のみならず、親も自然環境について子どもの育ちには欠かせないと考えていることがわかる。

無藤（2018）は園の環境について「幼児教育は独自の施設（幼稚園・保育所・認定こども園等）と空間において成り立つ。その特徴は、小さな子どもの身近な環境の探索を許容し、豊かにする空間の在り方にある。その探索を通してこの世界の様々な諸要素への出会いを可能にし、そこから気付き、工夫し、粘り強く取り組む力を養う」⁹⁾と述べている。園の自然への取り組

みは個々の園によって違いはあるものの、やはり、自然と向き合える環境は重要である。特に園庭の自然の豊かさは欠かせないと考えられる。都会の中にある園であっても、園内には豊かな自然を感じられるところが必要であろう。

様々な園のコーナーの自然を見てきたが、園内で見つけられた小さな生き物たちは、園の自然環境の中で育っている。その生き物を見つけて、子ども達は保育者に見せる。保育者は、見つけられたことをともに喜び、みんなで育ててみる。時にはうまく育たないこともある。小さな命をともに育て、時には落胆し、時には大きくなったことを喜び合う、これは人工的には行えない経験であり、体験や遊びを通して学ぶことである。同じように、園庭の中の栽培コーナーもまた、子どもとともに育てることに意味がある。苗から、または稲から育てる植物がやがて大きくなる。そして、収穫し、食べられるという経験は家庭では難しい場合が多い。これを経験せずに、ただ写真や、動画を見て感じることに、かかわりながら実際に経験するのとは大きな違いがある。経験を通して考え、五感を通して感じることに意味がある。飼育と同じように、時には失敗するときもある。大きな自然の中で、育てることの難しさも知ることもあるだろう。大きな自然は、自分の思うようになってくれない場合もある。自然は常に流動的であり、人の予測通りにならないことがある。この経験もまた、大切ではないだろうか。予測通り、思うようにならないときに、再考し、粘り強く取り組み、諦めない気持ちや、気持ちを立て直すことや、友達の意見を聴いたり、取り入れたりできるようになる。様々な変化を受け入れられることは、自然とともに育つこととつながると考えられる。このように多くの経験を通して非認知能力も育まれていくだろう。幼稚園教育要領に『自然』と何度も書かれているのにはこのような多くの意味を含んでいると考えられる。

保育環境の中の保育者という人的環境も重要な位置を占める。どんなに子どもにとって様々な環境が整っていたとしても、それに気づかない、無関心な保育者であれば、環境を通して、経験する、学ぶ、感じる保育は難しくなるだろう。環境のねらいが活かされにくくなる。子ども達が自ら環境を通して意欲的に学んでいくことは保育者の想いが必要と考えられる。そのためには、保育者自身が自然に対して、大きな感受性が求められる。大豆生田（2018）は「自ら自然に目を向け、立ち止まって五感を使い、美しさや、面白さ、不思議さに触れ、自然を愛おしく思えるような経験を積

むことは重要である。子ども達を自然になかに誘うだけではなく、大人が子供と同じように心を動かし『すごい!』と感嘆の声を上げ、子どものように楽しむ。大人もそういった経験が必要ではないか。そして、自然を愛おしく感じる感覚を子ども達と共有する。子ども達の『心もち』に丁寧に応じるためにも、大人がまず自分自身の心を動かし、センス・オブ・ワンダーを体感すること、まずそこから始めてみたい¹⁰⁾と述べている。保育者にとっても身近に大きな自然があるとは限らないだろう。園内の小さな自然であっても、保育者は五感を研ぎ澄ませて、自然を感じる事が大切である。保育者の言葉やしぐさ、行動は子どもにとって身近な、そして影響力のある大きな人的環境である。また、保育者としての在り方について井上(2018)は「保育者は子どもと時間を共有し、子どもの気づきに共感し、解説したり答えを与えたりせずに問いを投げかけ、子どもが自ら解決したりやり遂げたりすることを待ち、絵本や図鑑などを保育室に揃えるなど、子どもが答えを自分で探せるよう環境を整えます。」¹¹⁾と述べている。保育者の在り方によって子どもの育ちが変わるともいえるだろう。

様々な園のコーナー環境を見ると、保育者たちは、子どもにとっての自然環境を重要と考えてそのコーナーを作っている。時にはそのコーナーが大きくなることや、なくなることもあるだろう。子どもの様子や、興味関心に合わせてコーナーづくりを行っている。日本は四季がはっきりしていて、自然を感じることは難しくはないと考えられる。四季はどこか特別な場所に行かなくても、自然を感じさせてくれる。例えば、水について考えてみると、春の水の感触は少し優しい、夏の水は心地良い、秋の水はひんやり感じ、冬の水は時には変化して氷になって冷たく硬い、このように何気ない毎日の保育の中で自然を感じる事ができる。また、水の形は蛇口のひねり方一つで細くなったり、ぼたぼたしずくになったり、または、ホースから出せば、抑え方や、抑えるところで、噴水のように出たり、すごい勢いで出たりする。花に水をあげるじょうろを使えば、シャワーのように優しく形が変化する。大切なことは、保育者がいかに子ども達に様々な事象を感じられるように配慮するかどうかなのである。特別になにかを用意しなくても保育者のねらいや想があれば、子ども達は自然を五感で感じ取れる。わざわざ自然コーナーを作っているのは保育者の意図があるということだろう。自然コーナーには、それぞれの保育者の「ここを感じて欲しい」「これに気が付いて欲しい」とい

う意図が感じられる。

保育者の環境への取り組み事例報告として、大仲等(2021)は「保育者は、環境教育に取り組み始めてから、『保育者は、何を伝えなければならないのか』、『保育者は、どのように接することが望ましいのか』、『子どもがどのような気持ちを育むようなればよいのか』などを考えるようになり、事例を報告する際に様々な形で掘り下げて、丁寧に保育の内容を検討するようになってきている。その積み重ねによって『子どもの行動から、どのような環境観が育っているのか』を意識し、『どのような環境観を育てたいのか』という視点から子どもへの接し方を考え、園としての環境教育に関する見方を培ってきた。今後は、今までに培ってきたものを踏襲しつつも、子どもの育ちを見ていく上での思考を狭める先入観にならないようにする必要もある。保育を俯瞰する上で思考を狭める先入観の壁を突破しながら、自由に思考し、新たな視点や発想を持って試行錯誤し、新たな実践を展開していくことで、保育の質が向上するのであろう。と実践報告書で述べている。保育者たちが皆で環境保育を試み、俯瞰し、次年度につなげていくことができれば、園環境は、より良い子どもの成長につながるだろう。」¹²⁾と述べられている。子ども達の様子から、何度も繰り返し、どのように子ども達に自然環境を用意すればよいのか、どのようにかわっていけば良いのか、保育者たちは試行錯誤している。保育者が子ども達と向かい合うときには、この努力は常に必要となるであろう。

おわりに

保育室の自然コーナーや、靴箱の上の自然コーナー、玄関などのある自然コーナーなどは、子ども達の育ちにはなくてはならない環境であると考察する。しかし、自然環境は、もちろん園外にも多くある。例え、都会の中の園であったとしても、コンクリートの道のわずかな隙間からタンポポが咲いていることもある。子どもや保育者の得意な「見つける力」があれば、きっと自然や季節を感じることはできるだろう。幼稚園教育要領から読み取れる環境は、決して園内だけではないだろう。時にはいちご狩りに出かけることや、お芋ほりに出かけることもある。また、園の近くの公園やそこに行くまでの散歩道もまた、子ども達にとっては大きな自然環境である。大人になると時には大きな自然を見忘れることもあるだろう。しかし、子どもとともに生きる保育者は自然環境に対して敏感であることが必要であると考察する。自然の中で育まれる非認知能

力は、子ども達の人生そのものに影響を与えていくことから『自然』はなくてはならない環境であると考察する。

謝辞

研究ノートを執筆するにあたり、様々なコーナー遊びの写真をご提供下さり、多くのお話をお聞かせ下さった園の方々に心より感謝申し上げます。

引用文献・参考文献

文部科学省・厚生労働省・内閣府（2017）『幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領』チャイルド本社

レイチェル・カールソン（1996）『センス・オブ・ワンダー』新潮社 pp 15-36

公益社団法人 国土緑化推進機構編著（2018）『森と自然を活用した保育・幼児教育ガイドブック』風鳴舎 pp 23-85

NTT データ経営研究所（2016.2.18 nttdata-strategy.com）「都市地域に暮らす子育て家族の生活環境・移住意向調」子育て世代の移住定住施策として効果が高いのは『自然体験』を重視した保育・教育ニュースリリース 2 2021.12.30 閲覧

無藤隆編著（2018）『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』東洋館出版社 pp 50-51

大仲尚也・笹井邦恵・田中綾・西村恵理子・新田茉穂・井上美智子著（2021）「子どもと自然・命のつながりを知る 保育実践のあり方を探る -11- 田んぼビオトープによる園庭環境の発展」大阪大谷大学教育学部幼児教育実践研究センター pp 109-140

大澤力（2015）『環境』一藝社

高山静子（2021）『環境構成の理論と実践』郁洋舎

遠藤利彦（2017）『赤ちゃんの発達とアタッチメント』ひとなる書房